

北方から石油を運ぶパイプライン。
経済的・社会的影響が大きく論議された。



そこで数年間くらすとなれば、当然ながら、それまで住んでいた町や都市の社会環境をまねて作ろうとする。そこで、イエローナイフ、ホワイトホース、ヘイ・リバー、イヌビツクといった北方の近代な町は、大体、南部カナダの小さな町に似ている。

しかし、そうした町でも、南方と北方の違いは表面的だ。北方の町は、ときとして、何かまだ落ち着かない、浮わつた感じがする。北方の町は、ほとんどのカナダ人にとって、いまだに人間にとつて住みにくいところで、そこに住むとやはりいろいろな身体的、精神的苦痛を伴なう。冬は極端に長く、また時としてもすごく寒い。しかもほとんどずっと暗

い。冬になると、よそからきた人々は、わが家からどんなに離れて暮しているかを改めて痛感する。

とはいえ、カナダの南部から北方に移り住み、そこで働くようになった人々は、厳しい気候に大体適合している。タウンハウスを建てたり、家族をつれて移住するのは不可能だが、北極諸島の探査現場で働く作業員の交代を定期的にするなど、ほかの方法をうまく講じている。開発地域がさらに遠く、また気候的にも厳しい地域に移るにつれて、こうした解決法がもっと使われることになるだろう。

インディアン、エスキモーと開発

北方を故郷とする人々、すなわちインディアンやイヌイト（エスキモー）は、産業の発展により何を待たせようか。確かに雇用の機会がふえた。しかし、彼らの近代産業への適応はじゅうぶんとは言えない。文化的にも、社会的にも、経済的にも、先住民族は今でも獵師であり、わな師であり、漁師である。会社の従業員や政府の役人になりきった人は少ない。

しかも、環境の変化は先住民族にとつて、往々にして破壊的であった。彼らは強い伝統をもちながら、自分で進んでというよりは、必要に迫られて、先祖代々の生活様式を捨て、北方にある町へ移動した。そこで彼らは古い生活様式を続けることも、新しい状況になじむこともできず、疎外され、社会の隅で暮らすようになった。

しかし、それぞれの村や町では、状況の変化にうまく適応した人々や家族もある。自分たちの土地に対する権利を主張

するためにつくつたいろいろな団体を通じて、あるいは北西準州議会などの組織を通じて、彼らは北方の将来を決める上で重要な貢献をしている。連邦議会における北西準州の選出議員、ワリー・ファース氏は、先住民である。

先住民族が将来に対して特に憂慮しているのは、土地に関することである。広い地域で狩りや漁、あるいはワナをしかけるのは、インディアンやエスキモーにとって文化的基盤そのものであるが、近年になって、産業活動の増大や南からやってくる人々の増加により、自由に土地を利用することがむづかしくなった。問題は、彼らがどういうふうな、またどの程度の規模で土地を利用するかということだが、南に住む人々に分っていないところに、一部起因している。政府がこのような問題に気付いた場合は、時間をかけて大規模な調査を行うなど、解決にあらゆる努力を払ってきた。

開発と環境

それでも、インディアンやエスキモーは、自分たちの土地に対する権利を失うのを恐れて、要求を文書化することになった。交渉による解決を望む政府は、こうした作業を支援している。現在、いくつかの土地に対する要求書がまとめられつつある。すぐに解決されるのもあろうが、相当の時間をかけないと解決できずもないものもある。

北方における環境上の影響については、石油の探査や開発、鉱業、道路建設などに焦点を当てて論じることができようが、ここでは石油開発、中でもパイプライン

を例にとって考えてみよう。

一九六八年、アラスカのノース・スロップで大規模な炭化水素の埋蔵資源が発見され、カナダ政府と国民は初めて北方の環境と大々的な開発がもたらすと思われる環境上の影響に目を向けた。カナダの北極海でも同様の発見がなされる可能性は強い。石油の探査費としてあげられている金額の大きさは、この樂觀性を反映している。ノース・スロップで炭化水素が発見されるまで、大規模な石油開発（どんな開発でもいいが）の環境に対する影響については、ほとんど関心が払われなかった。例えば、環境が意識的に考慮されることがあっても、むしろ開発を阻害するものという観点からとらえられていた。